

とはずがたり

くとて、などやくるしきめを見るらん、わがくに、七三つくりすへたるさかつぼに、さしわたしたるひたえのひさごのみなみ風吹ば北になびき、北風ふけば南になびき、西吹ば東になびき、東ふけば西になびくを見て、かくてあるよと、ひとりごちつぶやきけるを、○下

〔十訓抄〕或殿上人の五月廿日餘いとくらきに太后宮にまいりて、めうどうにたゞみけるに、うへより人の音のあまたして來りければ、さりげなく引かくれてのぞきけるにつぼのやり水に蟹のおほくすだくを見て、○中しりなる人、かくれぬ物はなつむしのと、花やかにひとりごちたりけり、○下

〔藻鹽草人事〕語、○中

とはず語

〔倭訓栞前編十八〕とはずがたり。源氏物語に見ゆ、不問而自談也。

〔源氏物語〕大將殿は心ちすこしのどめて、あさましかりしほどの、とはずがたりも、こゝろふくおぼし出られつ、○下

〔千載和歌集十一〕題しらず

つ、めどもたえぬおもひに成ぬればとはずがたりのせまほしき哉

〔孝義錄陸奥十九〕孝行者赤城摠兵衛

若松の城下北小路町の名主赤城摠兵衛、○中はやくより父母につかへて孝を盡し、○中人の家に招かるれば、○中けふの客はたれくなりし、何のまうけ、くれの物語ありつるなど、稚子のとはずがたりめきて、くれぐと語りつゞく。

〔書言字考節用集八言辭〕泡カクシ小兒之語

〔倭訓栞中編四〕かたこと 片言と書り、少兒などの詞のまだよくも、調ならはぬをいふめり、